
彼女を作るために努力しようぜ

Arcturus

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女を作るために努力しようぜ

【Nコード】

N5693G

【作者名】

Arcturus

【あらすじ】

生まれてこれまで、彼女が一人もできたことのない冴上修司。高校では彼女を作ると言い張っているのだが…。果たして彼に彼女はできるのか!?

ブログ：入学式（前書き）

初めての投稿です。

読みづらいかと思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ：入学式

うう……眠い……。

枕元で鳴る、目覚まし時計で目が覚めた。

軽くのびをして辺りを見渡すと窓に、紅色を基調とした、まだ真新しい制服がかかっている。

「そっか……。俺……今日から高校生か……」

そう、今日は高校の入学式だ。この制服は、俺が今日から通うことになる”水連高校”の制服だ。

「あんまり実感ねえなあ……中学時代は”あんなん”だったし……」

俺の名前は、冴上修司さえがみしゅうじ。この春から、水連高校に通うため、一人暮らしを初めた。実家から学校に通うとすると電車で2時間と、遠すぎたからだ。彼女がいない歴〓年齢の悲しい漢おにいしです……。

それにしても、今日はいいい天気だ。完璧なる晴天。まるで、今日この日を祝福してくれているかのようにいい日差しが射している。

「よっし！着替えるか！」

初めて着る制服に、少しくきウキしながら着替え始める。Yシャツと学生服のボタンは第1ボタンをだけを、開けていく。ネクタイを締めて、左手首に買ったばかりの腕時計をしていく

……あれ？俺かつこいくね？惚れ惚れするね。ヤバイよこれ、どんな女も一発で落とせるよ！

（ナルシストが……）

えっ！？なんか聞こえたよ今！女神様か！？でも聞きたくなかったな、今の言葉！

（その格好……プツ）

吹いてんじゃねえよ！すっげえ腹立つんですけど！本当に女神か！？

（そつよ…私は女神よ……ブプツダサツ）

うるせえええ！さつさと消える！……いや、落ちつけ……神なんているはずねえ…幻聴だ幻聴……

（はあ？なに言ってるの？…ってかダツサ）

これ、やっぱ幻聴じゃねえ！！…ってか今思ったら人の思考読んでんじゃねえよ！

「落ちつけ俺……相手にしなければいいだけだ……よしっ！」

「さてと、早く飯食べねえと時間がなく……なる……」

現在時刻：8時45分

あれれ〜？おかしいぞお〜？

目をこすってみる。そしてもう一度時計を確認してみる。……変
化なし。

さて、今日はなんの日だったかなあ〜？……そうだね！入学式の
日だね！

よく考える俺え〜……………ハッ！そうか！

「H A H A H A！なるほど！この時計壊れてやがるZ E！」

（壊れてんのはあんたの頭でしょ……………1時間も鏡見てるからでしょ
うがナルシスト）

てめえ女神！まだいやがったのかあ！……っていうかそんなに見て
た俺？うわっ恥ずかしい！教えてくれたっていいじゃない！ひどい
わ！あんまりよ！

（うわあ……………オネエ言葉だし……………オカマナルシスト？）

うるっさいわね！……じゃなかった、うるせえな！つい、出ちまっ
たんだよ！

「って、こんなことしてる場合じゃねええええええええええええ
……………」

ここから、学校まで自転車で10分！式が始まるのは8時50分！今からじゃ間にあわねえ！完全に遅刻だああ！

「初日から遅刻かよおおお！」

ええいつ、嘆いていても仕方ない！飛ばせばもしかすると間に合うかもしれない！！

朝食は食パンでも、食べながら行けばいい！

急いで家を飛び出して、自転車にまたがりおもいつきりペダルを漕ぐ。幸い道は学校の少し手前で一度曲がるだけ！それまでは直進のみだ！

くそお！できれば、俺じゃなくて女の子が食パンくわえてて、曲がり角から飛び出てくればいいのに！

「って何をわけわからんことを考えている俺え！」

信号赤だけどかまってられるかああ！こんな小さい横断歩道まですいらんわあ！

ドンッ！！ベキィ！

つうう〜ん……？すごい嫌な音と、感触がしたぞお〜？

……車だ。しかも、自転車の前輪めり込んで……。

ハッハーン！なるほど、新パターンだな？そうだよな、曲がり角で正面衝突ってベタすぎだもんな！実は、車の中で食パン食ってて、事故にあってそこでフラグが立つわけだ……！

「フラグ立ったな………つてえ、そうじゃねえよなああああ！」

やべえええ！確実に壊れてるよあれ！もう自転車なんかいいわあ！走って逃げろおお！

「………待てえや、クソガキイ。わいの車に何してくれとんねん」

あ………死亡フラグ………？

ブログ：入学式（後書き）

文章能力が足りない…

訂正とか、アドバイスをくれると嬉しいです。

第1話・先生ってやっぱり怖いよね（前書き）

休みの間に、できるだけ投稿しようと思います。

学校が始まると時間がなくなるかもしれないので…

第1話：先生ってやっぱ怖いよね

「あ…危なかったああ…もうちょっとで、売り飛ばされるとこだった…」

結局あのと、俺はスキを見て逃げ出した。制服の勲章で水連高校ってバレたけど知らない。なんか後ろで「あのガキ、潰しに行つたる…」って聞こえたけど、知らない

まあ、そんなことおいといてえ、今俺は校門まで着いたわけですが……。

現在時刻：9時30分

ヤクザさんのせいで、すごいタイムロスしたよ……。まあ、当然の如く校門は閉まっているわけだして…。

「どうすつかなあ…」

遅刻した場合、遅刻届を出すみたいだけど……、んなもん出してられるか！ましてや、入学式の日だぞ！無理だああ！

……ということ、忍び込むかな！それに門も低いし簡単に乗り越えられる！……早速実行

「誰もいねえな……？　へへへ……お邪魔しまあゝす」

よしよし……！とりあえず、クラス分け見て自分のクラス見てくるかあ……。

「何をしている！」

な、なにいいい！人がいただと……これは非常にマズい……ここは……”必殺！！土座！！！”

「すみませんでしたああ！」

(なに騙されてるのよ、変態ナルシスト)

っっておめえええかあああ！紛らわしんだよ、クソ女神いいい！あと、何か俺の名前進化してる！やめてそれ！

(分かったわ、変人ナルシスト)

うん、あんま変わってないわ。

(ごめんなさい、変態？)

違うよ！？なに、俺に聞いてんの！？って、いかん！またこいつのペースに乗せられてしまっ！無視だ無視！

「チクシヨ……クソ女神のせいで無駄にでかい声出しちまった……誰か駆けつけたら面倒だ、なるべく早く早く行動しよう……」

とりあえず、クラスに鞆置いてこよう……俺のクラスは…。

「何してんだ？」

あんの女神……。そう何度もひっかかるかあ！

「しつげえんだよ！テメエ！」

「何が？」

「しらばっくれんじゃねえ！」

「……？ おーい、大丈夫か修司ー！」

「……え？」

「お前も遅刻かあ？」

「あああ！ヤス！」

「よう！なに、一人でブツブツ言ってたんだ？」

「い、いやなんでもない」

こいつの名前は虎島泰弘。通称ヤス。本人は、虎島だからタイガ
ーって呼んでほしいって言うてるけど呼んだことは一度もない。だ
って、なんかかっこいいし。ちなみにこいつとは、小学校からの付
き合いである。この、高校も親友のこいつと一緒に入ろうと言って
入った。

「……にしても、入学式から寝坊しちまったぜえ……」

「ハッ！ちゃんと早く寝ないからそうなるんだよ」

「お前も寝坊してんだろ！」

「いや、俺はしてないぞ」

「じゃあ、なんで遅刻してんだよ！」

「……おっ！お前と俺同じクラスだぞ！」

「話そらしてんじゃねえよ！」

「1・Bだってさあゝ行くこつぜ〜！」

「話を聞けえええ！」

「さあ……どうするヤス……入学式はもう終わったっばいな……^{ホム}H
^{ルム}R中か……？」

「うーん……ここは、堂々と遅れてきましたーって入ればいいんじゃないかね？」

今、俺達は1 - Bの教室の目の前にいる。しかし全員席についてなにやら担任の話を聞いているようだ。なんか全員震えてないか……？まあ、いいか

「よし、とりあえずそれで行け」

「オツケー！……っておまえも来いよ？」

「チツ……わかってるよ」

「なんで舌打ちしたの！？」

「ええいつ！行くぞ！」

ガラッ

「すみません。遅れましてわあああああああ！？」

ガンッ

ええええええ！ドア開けた途端、金属バット飛んできたよ！？誰よ！？しかも避けたらヤスに当たった！

「初日から遅刻とは良い御身分だなあ……オイ」

……

「……………間違えましたー」

ピシヤッ

担任めつちや怖えええええ！ あれ本当に女の先生！？ 始めてみたよ、本当に額にあんなんある人！（＃ あんなん）

バアアアアン！

「なに、逃げてやがる……………コラ」

ギヤアアア！ドア破ってきたああ！！！！あと、ヤス立ったまま気絶してんじゃねえ！器用だな！

「キ……………キレてますか？」

「……………キレてないっスよ（某芸人風）」

ああ、嘘をつけない方で？ 拳が震えてらっしやいますよ！？でもノリはいいですね！

「とりあえず、罰として保険室逝ってこい」

あれえ……………？逝ってこいって言ってません？それ。っていつか……………

「体罰はんたああいー！」

ガンッ

金属バットかいいい……………！やべ……………死んだお祖母ちゃんが見える

よ……

「祖母ちゃん……今……会いに行きます……」

バタッ

第1話・先生ってやっぱり怖いよね（後書き）

まだ、ヒロインが出てきません……
次回には出るかもしれない（あ

第2話・持つべきものは友達

「あー……ひどいめにあつたな……」

「ああ……そうだなあ……」

「ああん？なんか言ったかテメエら？」

「いえ！言つてません！」

さつき先生の金属バットで気絶した俺とヤスは、1時間ほど保健室で寝かされていたらしい。ちなみに先生曰く、『怪我しないように、気絶させたから大丈夫だ』らしい……。

どうやったたら金属バットで、怪我させないように気絶させれるのが非常に気になったが、ツッコむのは怖いのでやめておいた。

ちなみに今は、保健室で目が覚めたので先生と共に教室に向かっているところである。

「おい」

「はい。なんでしょうか！」

「テメエら遅刻したから、私の名前しらねえだろお。私は恋塚乙女だ。」

「え？偽名？」

ゴロンッ

うわぁ……頭陥没してるし……！生徒に何してんだよ！しかし、ヤスの気持ちも分かるぞ……。金属バット常時装備してる人に乙女って名前は合ってないよ！

ガンッ

「痛ッ！なにすんですかつ！？」

「テメエ今、名前合ってねえとか思っただろ」

人の思考を読まないでええ！！！あなた本当に人間ですか！？あとヤスウウウ！お前は何回気絶するんだああ！

「オラ！起きろ！」

ドスッ

「ぐはぁっ！」

おおっ！起きた！でも、また腹抱えて白目むいたまま倒れたよ……。なんか助けてって声が聞こえた気がするけど、友達として聞かなかつたふりをします。

「ヤス……お前のことは絶対忘れないからな……俺のことずっと見守っててくれ……」

「って、うおおい！友達を見捨てるなあああ！」

「チッ……生きてたのが良かったーわーいわーい」

「ちよ、なんで舌打ち!?!なんで棒読み!?!」

「遊んでねえで、早くいくぞテメエら!?!」

「「はい」「

「よし、じゃあ一応自己紹介しとけ。遅刻組。テメエら遅かったからしてねえだろ」

「はあい。冴上修司です。性別は女に近い男よお。夢…というより野望は、高校では彼女を作ることです!?!どうぞ1年間よろしくう〜!」

.....

えっ!?!なにかしら、この沈黙!?!スベった!?!あたいもしかしてスベった!?!

チクシヨウ!?!.....ヤスもうけないように.....邪魔しちゃう!

「俺は、虎島泰弘です。みんな、俺のことはタイガーってヤスって呼んでやってくれ」

「いや、タイg『ヤスって呼んでやってくれ』」

「おいおい！俺は『ヤスだ』」

「……………ヤスです。」

アハハハハハハハ！

おおっ！？思いのほかうけてる！？すげえよ！

「おいどん……………やっぱピンや無理ばい……………ヤス！キサンとコンビなら、やっち行けるかも知れねえ」

「え？なんで博多弁？つてかお前お笑い芸人目指してたんだ？」

こいつ、ノリ悪いよ……………。

「チツ……………俺らの席窓側の一番後ろだつて。チツ……………俺の前かよ」

「え！？なんか最近俺の扱いひどくないかお前！？」

「チツ……………気のせいだろ」

「舌打ちも多いし……………」

「いいから席座れ！」

「……………はいいい！すいませんん！……………」

「ヤス……どう思う？」

「いやぁ……こりゃもう文句ありませんよ……」

「だなぁ……」

「俺は32番と41番と44番かなぁ……修司は？」

「多いな……俺は出席番号35番かな？」

「ええええ？なんか、”お嬢様”的なオーラ放ってねーか？」

「バカヤロー。そこがいいんじゃないか。それにすげえ美人だ」

「お前なぁ……いつつもいつつも、攻略難関な奴ばっか選ぶから、いつまでたっても彼女できねえんじゃないか」

さて、もう分かてるかと思うが、現在クラスメイトの女子をチェック中だ。このクラス、レベル高いのがすごく多い。これは……チャンスだろおお！？

「ヤスちよつと、35番……もとい”桐嶋 早弥”に話しかけてきてくんね？」

「俺かよ！？自分で行けつて！」

「お願い！俺達親友^{マフ}だろ……？」

「この野郎……ここぞとばかりに……。わかったよ！行ってくりやいいんだろ！？」

「ヨロシクウ！」

「あのおく……桐嶋さん？」

「……なに？」

「あ、え〜とですなえ……」

「……えつと！あいつ！修司が話あるってさ！話してあげてよーじゃー！」

おいおいおい！！！待てえええ！なんてことしてくれやがったあああ！誰がきかけ作ってくれって言ったあああ！

「（ごめん……ギブ）」

「（早すぎだろ！本当に話しかけただけじゃねえか！）」

「（いや、だって……妙な威圧感があるんだよう！）」

「（だからって、変なきっかけ作ってんじゃないやねえ！）」

「話ってなに？」

げっ……………！こっち来ちゃったよ！……………どうすんのよ？俺！

「……………」

めっちゃ睨んでるよおお！無言で睨まれるのってきついよおお！

「……………え、えつとさ」

やべえ！声上擦っちゃった！なにこいつみたいな目で見られてますけどお！

「なんなの？」

「えっ……………あ、っと」

ええいつ……！ままよお……！……！……！……！……！……！……！

「いやねえ、友達になってくれないかなあ……なんて思ってた……
……………どうっ？」

「お断り」

「……………そう」

「それだけ？」

「はい……………」

「チツ……………」

し、舌打ちされたあああ！ごめんよおヤス！いままでお前がどんな気持ちだったのかわかったよお！

「ウツ……………ウウウ……………」

「……………修司？」

「なにを……………」

「…やっぱり、予想通りありや”お嬢様”タイプだね」

「そう……………だね……………」

「……………修司！俺はいつまでもお前のそばにいるぜ！」

「……………ヤスウ！」

「修司！」

「「うおおお！」」

ガシッ

そのまま帰りまで、二人で抱き合っていた。

第2話・持つべきものは友達（後書き）

訂正とか、アドバイスをくれると嬉しいです。

第3話・復讐は恐ろしいですよ（前書き）

うーん……。セリフがどうしても多くなってしまう……。
今回の、ストーリー分かりにくいかも知れません。

第3話・復讐は恐ろしいですよ

あのあと、二人で抱き合っていると乙女先生に呼び出されたと思
ったら、生徒指導の先生にこっぴどりしぼられました。はい。

何でかって？そんなもん朝遅刻したからですよ！

そして、今……

「はあ……なんでこんなこと……」

「まあまあ、掃除ぐらい普通にやってくれば終わるだろ？課題とかい
きなり出されたらどうしようかと思ってたぞ」

「まあな……遅れた俺等も悪いし……」

「そつだそつだ。……でさ、お前は何で遅刻したわけ？」

「あつ！あそこにスゴイ汚れ発見拭き取らなきゃー！」

「また、はぐらかしやがった……そんな言いたくないのか？俺達……
…親友^{ラブ}だろ……？」

「え？そつだつけ？」

「あつ！ひどいー！」

「いいからさっさと掃除終わらせようぜ……」

「はあ……大方、鏡で身だしなみチェックしてたら遅れたんだろう
？」

「……………」

「えっ…？マジ…？？」

「バツ！ちょっとちげえよ！」

「なら、ちょっとあってるのか……………じゃあ、制服姿の自分に見惚れてたとか？」

「……………」

「……………マジ？」

「……………他言したら殺す」

「ひっ！！いわねえよ！やめて！怖い！乙女先生なみに怖い！」

ガンッ！

「うがあああ！い、痛い！先生いたんですかあ！？」

「そんなことより……………今なんつったテメエ？」

「乙女先生は、とても美しいと言いましたあ！！！！」

「ならよし」

そういうと、先生は踵を返して教室から出て行った。……………あれ？もしかして、職員室から来たのか！？職員室って俺らの教室の真上

だろう!? 地獄耳にもほどがあるぞ!?

「とりあえず……終わらせようか……」

「んだ……」

「よっしゃあ〜! 修司帰ろうぜ〜!」

「おう、帰るか」

掃除が終わった俺とヤスは、生徒指導の先生に少し説教されたあと解放された。現在時刻6時30分である。そして、靴を履き替えた俺は、校門を出たところで……ヤクザさんに捕まった。

「……クソガキ。探したで……」

ギィイヤアアア!! 追いかけてきたんですね!! しかも3人ですか!! って、ヤスウウウ!! 他人のふり決め込んでんじゃねええ!

「おい、コイツ等連れてくぞ」

あ、ヤスも入ってる。

「どうええええ!? 俺もですか!?!」

「……こいつの知り合いだろお？」

「……………チガイマス」

おいおい！俺お前のこと見損なつたよおお！…ってかさつき肩ならべて歩いてたジャン！その嘘苦しすぎるよ！

「そうか、じゃあコイツだけ連れてけ」

うそおお！？信じちゃうの！？…ってヤスなんで自分で言っというてビックリしてんだよ！

「あ、じゃ、失礼しまーす」

マジで帰つたよ！しかもすごいスピードで！最低だなアイツ！

「オラア！来い！」

「グッ……………」

そう言つと、ヤーさんは俺の頬に拳を叩きつけてきた。しかも、鳩尾に膝蹴りをつけて、俺はその場でうずくまった。

「立て！オラア！」

クソツ……………マジでヤバイ……………やり返してやりてえ……………。でも……………俺は……………

「何をしているの……!」

「オオ?なんだこの女?」

…… ああ?…… 誰だ?

「オイ、コイツめっちゃかわいいやんけ!」

「コイツも、連れてくか」

なっ……!?!桐嶋早弥!?!な……なんで……!?!それより……桐嶋があぶねえ……

「に、げろ……!」

「アア!?!そんなんわいらが許すはずないやろお!?!それにこいつから首突っ込んできたんや」

チクシヨウ……情けねえ俺……女一人守れねえなんて……

「好き勝手言ってくれてるわね」

ボコッ

なっ！？ヤーさんに手出しやがった！！！！しかも顎におもいつきりいったよ！？

「こ、このアマア！！」

「遅いッ！！」

なにが起きてんだ……………？コイツ、本当に桐嶋かよ……………！？桐嶋つてこんな強かったのか……………！？

「チ、チクシヨウ！覚えてやがれ！！！！」

あ、定番のセリフだ。つて……………ええ！ヤクザ追い返した……………！？二人はそこで気絶してる……………嘘だろ！？

「……………」

「……………」

え！？何か言ってるよ！！なにこの沈黙！！怖いよ！

「……………あなた、大丈夫？」

「え、あ、なんとか……………」

「ふうん……………」

「あ……………」

桐嶋は、それだけ言うとは歩いていく……。何でだろう……。？俺を助けてくれた……。？それにしても……………

「……………曲がり角から覗いてるそこのお前」

「ハイッ!？」

「よくも見捨てやがったな……………？」

ヤスである。というかあいつ一部始終見てやがったな!？こっちは、めちやくちや痛い思いしてんのに!

「……………あの、ゴメンナサイ」

「……………アラ?私達もう友達じゃないんですけどっけ?」

「許してくれよおお!修司いい!」

「はあ……………まったく……………。もう顔あげろよ……………」

「修司……………!」

「……………ペガサス彗 拳!……………」

ドオオン!!

顔、あげた瞬間に俺の渾身の右ストレートをヤスの鼻っ柱に叩きこんだ。

「ちょ……ペガサス 星拳、なんか使いやがって……！普通のやつなら死んでんぞ……！！」

あ、お前普通じゃないのね。ってか本当に人間ですか？

「グハア……」

アララ、気絶しちゃった。

………よしっ！置いてこっつ。

第3話・復讐は恐ろしいですよ（後書き）

訂正とか、アドバイスをくれると嬉しいですよ。

第4話・もしかして、デジヤヴ？（前書き）

すごく、長くなった・・・。

第4話…もしかして、デジャヴ？

「うああああ……………？」

枕元で鳴る、目覚まし時計で目が覚めた。

軽くのびをして辺りを見渡す……………ん？デジャヴ？……………気のせい
か？

「はあ……………よく寝たあ！今日はいいい日になりますように…。昨日は
散々だったからなあ……………」

さあて、時刻は……………7時！YES！

「よし、時間はある！着替えてから飯も食う時間はちゃんとあるな
！」

昨日と同じように、Yシャツと学生服のボタンは第1ボタンをだ
け開けて着る。そして、3万した腕時計をつける……………やばい
な、俺。かつけーぞ、これ。

「……………ハッ！いかん！また時間がなくなる……………！」

フッフッフ……………。俺は同じ轍は踏まんぞ！ざまあめやがれ、女神！

……………

えっ！？なんで、出てきてくれないの！？

……………べ、別に出てきてほしいとか思っていないんだからね！ただ、またいるのになって気になっただけなんだからね！

(え？ツンデレ？)

居るのかよ！！！！言ってくれよ！！寂しかったジャン！！

(あ、やっぱり寂しかったの？)

なな、違うわよ！間違えただけよ！べ、別に出てきてくれて嬉しいとか思っていないんだからね！

(だから、なんでツンデレ？)

うるさいわよお！……………ハッ！またオネエ言葉になってる！！チクシヨウ！乗せられた！

「ああもう！飯食って早く行こう！」

……………

……………

……………

「よう！やっときたか！」

食パンを2枚食って、外に出るとヤスが待っていた。ちなみに、俺が住んでるこのアパート”時雨荘”の向かいの家はヤスの家である。なんでも、両親に一人暮らしするなら家を買ってやるとか言われて、家一軒買ったらしい。……このボンボンがあ！！こっちは築50年の木造ボロアパートだぞ！！！！

「よお、ボンボン」

「えっ！？………なんかごめん」

謝っちゃったよ。

「まあいいや。お前……自転車か。後ろ乗っけてって」

「え？なんで？お前実家から持ってこなかったっけ？」

………そうだった！説明してなかったなここまで。

「いやあ、昨日ヤクザさんの車にめり込ませてさあ。」

「いやいやいや！お前サラッとすごいこと言ってるよ！………ってか昨日のヤーさんそれで来てたのか！！！」

「いやあ、まあねえ………」

「なんで照れてんのか分かんねえ………」

ん？寝めてたんじゃねえのか？

「とりあえず、レッツゴー！！」

結局俺は、ヤスと二人乗りして学校に向かうことにした。途中で前輪がなくて、カゴがぐしゃぐしゃの自転車が落ちてたけど、知らない

「よし！お前時計持って来てるだろ??今何時だ？」

「8時20分」

「8時30分が登校時間だよな?じゃギリギリセーフだ」

「うーん?これはセーフか？」

「は?大丈夫か修司?どう考えても……」

「いや………乙女先生いるけど?」

「二人乗りで登校とはやるなあ………オイ………」

「……………アウトだろ」

さあ、逃っげろ」

「「すみませんっしたあああ」「」

「修司！学校前では降りろよ！！」

いやあ、気づいたら目の前でもう乙女先生がキレてたもんで。っ
てかヤス？金属バット飛んで来てるぜ？

ガンッ

「痛ッ！ヤベエ！怖いよおおお！！」

あーあ。注意したのに。心の中で。しかも、捕まっちゃった。テ
ヘッ

「とりあえず……………ついて来てもらおうか？岡田先生のところ連れ
てってやるっ」

また、生徒指導の先生の説教かよおお！……………ってかヤス！涙目な
ってんじゃねーか！

「さあ、行くぞ」

「「アアアア……………」」

「今後、気をつける」

「はい……失礼しました」

で、結局説教喰らいましたとき。早くクラスいかねーと、もう始業のベルなつたよ……。

「あーあ……修司のせいだぞ……」

「いや、学校前つく前におりつけて言わねえからだろ……」

「いやいや、降りてるもんだと思ってた。お前のせいじゃねえか」

「いやいやいや、お前が思い込んでただけじゃん。だからお前が悪い」

まあ、そんな感じで責任のなすり付け合いをしていたら、我がクラス1 - B についた。

ガラッ

「……ありゃ？」

「あれ？現国の先生は？」

「いねえなあ……。ラッキーじゃん。遅刻扱いならない」

「じゃあ、席座つとこうぜ」

と、自分の席に向かう途中で、桐嶋早弥と目が合った……。そう
えば昨日……。ってかなんか睨んでない……？

「あ……桐嶋さん」

「……………」

えっ！？シカト決め込んでる！？そんな嫌われたのか……。っ！？

「え、えーと……昨日、なんかありがとうね」

「……………あいつらが、目障りだっただけ。お礼言われるようなこ
としてない」

「……………そうスカ」

……………席座つところ。あと、ヤスがニヤニヤしてやがる……。あと
で、鼻にケシカス詰め込んでやろう。

「じゃ、寝てるから。自習」

「うおい！！本当に寝てるし！！よく、クビになりませんね！！」

「まあラッキーじゃん。授業ないんだし」

「……なんでコイツは、紙飛行機作ってるんだろつか。見つかったら死ぬだろ？」

「おい、ヤス。いくらなんでも遊んでたら怒られるんじゃないか？」

「大丈夫！バレないようにやるか……らっ！」

「窓から外に飛ばしやがった……。しかし、どんな軌道してんだよ……。まっすぐ飛ぶの作れや！」

「ん………？ヤスウ………？なんか嫌な予感する………」

「はあ？なんで？」

ヤスが投げた紙飛行機は……クネクネと不規則な動きをしながら、教室の前の窓から、また教室に入ってきた……。そして、行きつく先は……。

「おまえ……狙ってやったのか？」

「違う……断じて違う！」

「……………私に、紙飛行機あてたのはどいつだあ……………!?!」

ギヤアアアア!!なんでこっち睨みながら言うんですか!?!もう、俺らって決めつけられてねえ!?!

ガンッゴンッ

金属バットが飛んできやがったあ……………!しかも、何故俺まで当てられたんだよおお!やべえ……………死んだ、お祖父ちゃんが見える……………!

「……………祖父ちゃん……………いま、会いにゆきます……………」

あれ、これもデジャヴ?

第4話・もしかして、デジャヴ？（後書き）

訂正とか、アドバイスをくれると嬉しいです。はい。

第5話・委員長と副委員長

「う……ぐう……」

ああ……？どこだ……？ってか何でおれは寝てたんだ……？

「おお、修司起きたか」

「は……？ここ、学校……？」

「そうだよ、俺もついさっき起きてさ。1時間半気絶してたぞ俺ら。んで今は休み時間だ」

あ……そうだった。金属バット頭に喰らって気絶してたんだ……。

「……って、なんで俺までやられたんだよ！紙飛行機作ったのも、先生にあてたのもお前じゃねえか！」

「……俺に言われても……ねえ」

それにしても、相変わらず怪我してないな……。あの先生何者だ？

「んなことより、次HRらしいぞ修司。また乙女先生だ」

「げっ……嫌だなあ……ま、どうせまた遅れてくるだろ」

「いや……まだ前で寝てるけど」

なんで！？どんだけ寝てるんスカ！！ってか俺ら1時間以上気絶

してたつてことが授業1回ありましたよね！？授業中も寝てたんで
スカそこで！

キーンコーンカーンコーン

「…………んあ？…………朝か？」

あああ！ベルが、鬼を起こしたあ！しかも、朝じゃねえよ！？

「チツ…………HRか…………今日は、委員長と副委員長を決めた。冴上と
虎島だ」

えええええ！？決めますじゃなくて！？決定事項ですか！？なんで
俺とヤスなんだよっ！

「ちょ、先生！俺等じゃ無理ですよ！」

「そうですよ！なんで俺とヤスなんですか！？」

「お前ら二人いつも一緒にいるから」

なにその決め方！？ひどいよ！？ってか仲良い二人組って他にも
いるよ！？ええいつ…………！どうにかして抜けて……………

「先生。私、委員長に立候補です」

……桐嶋早弥あああ！わざわざ、立候補つてすげえな！だが、ナイスだ！これで俺は……

「じゃあ、修司を副委員長に推薦します！」

な、なにいいいい！ヤスウウウ！裏切りやがったなあああ！？

「ハイ、じゃ委員長桐嶋。副委員長冨上だ」

「まったまった！じゃあ、俺はヤスを副委員長に推薦します！！」

「もう、遅い。お前で決まりだ」

ヤスウウウ！テメツ！この野郎っ！なんだその顔おお！なに、勝ち誇った顔してんだコラアア！

「じゃ、HRを終わる。ハイ、新委員長号令」

「起立、礼、着席」

「あー、委員長と副委員長は今日放課後残れ。いろいろ仕事あつか
ら」

「はい、分かりました」

………ん？でも、なんかこれチャンスじゃね？えっ！？マジ
！？まさか……ヤスッ！

「おいおい、修司！きっかけ作ってやったんだから！ちゃんとアタ
ツクしろよ？」

「……ヤスウ！お前ってやつぁ！」

ガシッ

とりあえず、抱き合っていた。

……

……

……

で、なんやかんやあって。

「それで、俺らはなにすればいいんスか？」

「とりあえず、明日配る資料運べ。資料室分かるだろ？そっからとつて来い」

「はい」

「……資料室ってどっ？」

「私はわかります。……あなたはついてきなさい」

何か今、嫌そうな顔しませんでした……？ちょっと傷ついたわ……

「ね、ねえ、桐嶋さん」

「……………なに？」

「……………桐嶋さんってなんか習ってたの？」

「は？」

「怖えよ……………。ドス聞いた声で『は？』って……………。かわいらしく『え？』とかで良いじゃない！」

「なに？なんなの？」

「あ、いや、あの……………この間ヤクザ倒してたジャン……………？なんであんな強いのかなあって……………」

「ああ……………いわゆる、”由緒正しきお嬢様”って奴だから。いろいろ習わされてるの」

「あ、そうなんだ……………」

「まあ、大体雰囲気で分かってたけどねえ。にしても教えてくれるとは思わなかったな。『あなたには、関係ないでしょ』とか言われると思つてたよ俺。」

「それにしても、あなたは弱いわね。やられっぱなしだったじゃない」

「……………っ！」

「どづしたの、何も言えないの？」

「……いや、俺は喧嘩しない主義だから」

「しないじゃなくて、できないの間違いじゃないの？」

「ああ………」

「え……ちょっと……な、なんで、そんな顔するのよ……。」

桐嶋が動揺してる……。きっと今の俺は、それほどひどい顔をしているんだと思う……。 ”あのこと”は考えるな……。クソッ……。

「……資料室はここよ」

「ああ……この、ダンボール持ってけばいいんだよな？」

出来るだけ、明るい声で言うが、気分は最悪。

「……そうよ、私はこっち持つから、あなたはそっち持って行って」

「いや……力仕事なら男に任せといてよ」

そういつて、桐嶋から、ダンボール箱を奪うようにとる。そして、ダンボールを2個重ねて持つ。

「ちょ、ちょっと。それ結構重いわよ？」

「あはは……大丈夫大丈夫」

愛想笑いも出来ているかどうか分からない……。多分、相当ひきつっていると思う。

「そう……。ありがとう」

え！？桐嶋がお礼言うとは……。まあ、由緒正しきお嬢様とか言ってたし、そこら辺は礼儀正しいってことか……。でも、その言葉を聞いただけで何故か気分が楽になった。

そのあと、一言も会話せず、仕事をやり終えた。校門を出ると、ヤスが待っていてくれたので、一緒に帰ることにしたが……。やっぱり、まだ本調子ではないようだ。ヤスに、心配されてしまった。……今日は、飯食ってすぐ寝よう。

何もすることがないと、またあのことを思い出しそうだ。

第5話・委員長と副委員長（後書き）

訂正とか、アドバイスをくれると嬉しいです。

第6話：男勝りな女性

「おっせえよ！ヤス！遅刻するだろうが！」

「なにいい！？お前乗せてっから遅いんだよ！まず急がなくちゃいけない原因はお前だ！」

昨日と同じように、ヤスの自転車で二人乗りして学校へ向かっている。現在時刻は、8時25分。タイムリミットは、残り5分だ。ちなみに、遅刻の原因は日課になりつつある、女神との口論でした

「うるせえ！とりあえず頑張っつて漕げえ！」

「なんつー理不尽な！お前、あの前輪ない自転車乗ってけや！！」

あ、まだ落ちてたのね、あれ。

「いいから、頑張れヤスウウウ！」

「残り2分……なんとか校門は通れたか……」

「ハア…ハア…俺もう死にそう……」

ん？ヤスが体力の限界みたいだ。仕方がないやつだ、まったく。

「まあ、とりあえず教室行こうぜ。」

「お前は、気楽でいいな……」

そんなことを言いながら、校舎に入ると、怒鳴り声が聞こえてきた。

「……………誰かキレてんな」

「だねえ」

ヤスはたいして興味なさそうに言う。そのあと昇降口で靴を履き替えて、階段を上っている途中、二人の人影を見つけた。

「あん？どつした修司」

「あいつ……綾川琴音じゃねえか？」

「え？俺らのクラスなの？」

「ああ、お前がチェックしてたやつだ」

「……説教中か？やかましいな」

そう、怒鳴り声が聞こえたのは生徒指導の岡田が怒っていたから。そして、説教されているのは、1 - B 出席番号32番、綾川琴音だった。

「チツ……朝からあんな大声だしやがって。あんまい気分しねえな……」

俺は、そういつと鞆の中から”あるもの”を取り出した。

「って、ちょっ！おい、修司！それはやめとけて！」

ヤスの注意を無視して、俺は”あるもの”を岡田に向かって投げた。

パンッ

水風船である。

「な、なんだ！？グアアア！目が痛いっ！！」

「よっし！ジャスト顔面！」

「いやいやいや！お前なにしてんの！？なんかあの水赤いんだけど！？ってかその前になんて鞆に入ってるの！？ねえ！？」

「バレねえうちに逃げとくぞー！」

「シカトかああ！シカトなのかあああ！」

なんか、叫んでるヤスは放っておいて、俺は教室へと逃げ込んだ。結局ヤスも叫びながら逃げてきたみたいだ。あ、ちなみに水風船の中身はタバスコです

「お前なにしてんだよ……」

「いや、なんかうるさかったジャン？」

「バレたらどうするんだよ……」

「ヤスのせいにする」

「おいしい！それはひどいだろ！！」

「もう8時35分だ。そろそろ席座つとこつぜ」

「またシカトか……」

あ、本気で落ち込んでないかコイツ？まあいいか。その内立ち直るだろ。

「あ、冨上君！」

「あん？」

「ありがとね！さっきのあんたっしょ？いや、ナイスナイス」

おお、綾川だ。……なんかこの子バカ笑いしながら背中叩いてくるんですけど！かわいい子だと思ってたけど男勝りだったのか……

ドスッ

「えっ！？ちよ……初対面でいきなりレバーブロー……！？肝臓が
あ……………」

「今、私のこと男勝りとか思ったでしょ」

なに！？この子も思考読めるの！？乙女先生と同じ特技持つてるよ……！

「ど、どうやって分かるんだ…………？」

「勘」

ちよ！もし、違ってたらどうするのさ！？まあ、あたってたけどさ！思っちゃったけどさ……！

「うう……………にしてもレバーブローはないぜ……………めっちゃ綺麗に入ってた……………」

「あれ？どうした？修司」

うわ……………復活したのかよ、ヤス……………。

「えーつと、ヤス君でいいのかな？」

「え？ああ、綾川さん？それは、いいけど……コイツどつしたの？」

「いやあー、ちょっとレバーブローしただけ」

「え……？」

ドスッ

ああ……ヤス……お前も男勝りとか思ったんだな……。

「いやーっ！メンゴメンゴ！もう、条件反射に近いからさ。悪口言われてると思ったら体動いちゃうのよ」

肝臓に一発入れられたヤスは、今お寝んね中。いや、お前よく気絶するね。ってか肝臓いれられても普通動けなくなるぐらいじゃない？

「マジで痛かったよ……綾川さん、あの、ボクシングとかやってた

「頭がああ！い、いつてええ！ちょ！机は危ないヨ！？」

「本当にこの子女？いや、机をお手玉するような子を女とは呼ばん！って思ったでしょ」

勘なのに、なんでそんな具体的に分かるの！？それ、すごいよ！？

「あ、そうだった。お礼言いに来たんだったね。」

「ええ？」

「ホラ、私が先生に怒られてたら助けしてくれたジャン」

「ああ、あれは岡田がうるさかったからやったことだから」

「いやあ、でもありがと、ありがと。こっちは助かったよ」

「そ、そうかい……」

「……んあ？」

ヤスが目を覚ました……。なんかちょっといい雰囲気だったのに！この野郎！！

「あれ……？なんで俺はここにいるんだ？確か、昇降口にいたよう
な……」

気絶する直前の記憶が飛んでらっしゃる！なんで！？そんなに効いたのか！？レバーフック！

「え？え？あ、ああ……ヤス君昇降口で急に倒れたんだヨ？」

アツー！この子嘘ついちゃったーっ！でも、目がすごい泳いでるよ！？不自然すぎる！

「ああ……そうだったの？」

信じちゃった……。コイツ将来詐欺にあわないかな……。心配だよお母さん……。

「まあ、そんなことよりヤスくん。よろしくね！」

そう言いつつ琴音は、ヤスに握手を求める。いや、急にどうしたんだい？

「え？うん……なにが？」

「ええ？親友^{ダチ}つしょ？親友の親友は親友^{ダチ}って言うじゃん！」

ええ！？急展開！いつの間にか俺らは親友^{ダチ}にされてしまったらしい！あと、普通は友達の友達は友達じゃない！？いきなり親友^{ダチ}って関係深すぎるよ！

「え、ああ……？修司って綾川さんと、友達だったの？」

「まあ、ついさっきね……」

「ふうん……まあ、よろしく」

「うんー！よろしく」

ピシガシグッグッ

あれ！？ 握手じゃなかったの！？ しかも、ちゃんと真顔でや
ってる！ でも、そんなんじゃダメだよ！ まず、Y E A A A H つ
て言うてからじゃないと！

「よしよし！んじゃ、もう授業始まるから。まったね」

そう言つと、琴音は自分の席に戻つていった。うーん、今思つた
ら女友達つてやつ、初めてだな俺。まあ、あんまり女として見れな
いから、つるみやすいつてもあるな。

「修司い……なんか……いいなあ」

「ああ……琴音は見た目は美人だしなあ……」

「そつだなあ……ん？」

「……どうした？ヤス」

「お前……なんで琴音つて名前て呼んでんの？」

「次の授業なんだっけ？」

「おおい！無視するなよう！」

「起立、礼！着席」

「よっしゃーっ！終わったあ！」

「修司！帰るぞお！」

時は経ち、現在LHRが終わってあとは、帰るだけである！んでもって、ヤスと帰ることにしたのだが……

「あ、修司くん！ヤスくん！一緒に帰ろーぜー！」

遠くで俺達を呼ぶ声がする。まあ分かっているだろうが琴音の声だ。しかし、恥ずかしいことこの上ない。こういつときは……

「よし、ヤス」

「そうだな」

「スルーで！」

とりあえず、二人で逃げた。

「ちよ、ちよっと待ってよ！」

なにいいい！？一瞬で追いついただとお！？今10メートル以上離れてたでしょ！？どんな、脚力！？

「ど、どうしたの？」

「今、逃げようとしなかった！？」

「いやいや、まさかあ！一緒に帰ろうか！」

「え、あ、うん……」

結局、俺達は3人で帰ることにした。なんか、野郎から殺気を感じるよ！でも、ちよっと優越感！

「ああー、今日は二人と友達なれて良かったよー」

う、嬉しいこと言ってくれるじゃないこの子！あたかもあんと友達になれて良かったよ！

「あ、なあなあ、そういえばいつから二人は友達になったわけ？」

「え？あ、ああ、朝いろいろあったのよ」

あ、そっか、そういえばコイツ記憶飛んでるんだ。……あれ？なんか忘れてねえか俺？朝いろいろあった……

ガシッ

「……冴上。ちょっと話がある」

あれれ〜？すごい嫌な予感がするぞ〜？

とりあえず振り返ってみようか！うん！

.....

ギヤアアアアア！　岡田センセエエエ！　目が真っ赤ですよ！！　俺がやったんですけどね！！　それと、ヤスと琴音なんではないの！？

「は、話とは、なんでしよう」

「朝、俺になにしたか覚えてるよな……？」

なんで分かったの！？　誰か密告チクったのか！？　く、くそう………」
うなったら！

「タバスコ風船2号！」

パシッ！！

う、受け止めただとおお！？この、近距離でええ！？

「ほう……いい度胸しとるな貴様……！」

パンッ

投げ返されたああああ！ぐおおおお！先生の痛みが分かったあああ！

「目があ、目がああ！（某大佐風）」

ヤ、ヤベエ目があけらんねえ！あつ！？襟首つかまないで！やめて！引つ張らないでええ！

「よし、逝こうか……！」

行こうかですよね！？逝こうかって言ってますんよね！？あつ！どこに連れてくんですかああ！

「アアアアアアアアアアアアアア………」

第7話：突撃！隣の晩御飯

「ヤス君って何者!？」

「……は？」

俺は、学校に来て教室のドアを開けた途端、琴音に訳のわからないことを聞かれた。

「まあ、俺が知ってることは……。人間じゃないってことかな？」

「そんなことは知ってるよ!」

「待て。俺は人間だ」

なんだヤス。もう、いたのか。

「そんなことは、どうでもいいのよ!」

「そんなことどうでもいいって酷くないかなあ……。」「

落ち込んでるヤスは放っておいてと。はて？じゃあ、どういこうとだ？

「昨日、修司君置いてって二人で帰ってたらさ、サラッと金持ち発言したのよ!」

あ、やっぱり置いてかれたんだ……。ちょっと寂しいな……。って、金持ち発言したって？

「ああ、ヤスの親父って虎島財閥のトップだもんな。金持ちだよ。ってかヤスなんて言ったんだ？」

俺は、琴音にそう質問する。だって、俺が見る限りあんまヤスって金持ちっぽいところ見せねえと思うんだけどなあ。

「昨日帰りにさあ！ コンビニで買い食いしようって言ったら、色々奢ってくれたわけよ！ しかも大量に！」

ほう、ヤスめ。俺には、奢ってくれないのに女には奢るのか。……あとで、タバスコ風船をお見舞いしてやろう。

「それで、もんだいはその後！ 買ってくれたあと、『こんなにいいの？』って聞いたたら、『ああ、金なら腐るぐらいあるからいいよ』って言いやがったんだよお！ ウザッて思ったね！なんか無性に腹立ったからローリング・ラリアットしてやったよ！」

相当キレてんな、琴音……。ローリングラリアットって……。あんな、すごい力あるから怖いよ……。まあ、もしもそんなこと言われたら、俺も腹立つけどさ！

「とこういうことだっ！！今日は、ヤス君のお宅拝見！！」

えっ！？結局、それが言いたかったの！？

「ええ！ダメだよ！俺ん家は無理無理！」

「え？なんで？別に実家行くんじゃないんだから。今のお前の家そんな豪邸でもないじゃん」

なんで、コイツはこんなに焦ってるんだろう？女の子には見られて行けないものでもいっぱいあるのか？

「あれ、そうなの？てつきり、でっかいお城に住んでるのかと思っ
た」

琴音が、首を傾げながら言う。なんでちょっと残念そうなの？やっぱ女の子は、お城とかメルヘンチックのがいいの？……………いや、
琴音に限ってそれはない……………

クルツドスッ！

口、ローリング・リアットオオオ！？そうだった、この子思考読めるんだ……………！時に、ヤスよ……………お前はこんなのを喰らっていたんだ……………。相当キツイ……………死ぬよこれ……………。

「いや、普通の一軒家だよ」

ヤスは、平然と返事してる。……………あれ！？俺のことはノータッチで！？心配ぐらいしてくれ！！

「じゃあいいじゃん！…！」

「ダメよお！とにかく、私の家はダメなお！！」

そう言いながら、ヤスは走って逃げて行った。オネエ言葉なってるぞ、ヤス。動揺しすぎだ。あれ……そうえば、俺もヤスの家ん中見たことないな……。これはなにかあるのか……？

「むう……怪しい……。修司君！……あれ？なにしてるの？そんなところで寝てたら服汚れるよ？」

この子、自分のやったこと忘れてるのおおお！？あなた、俺になにしたよ！？思い出してええ！

「まあ、いいや。それより、なんかヤス君怪しくない？」

思い出してくれなかった……。なんか自身なくすわ……。

「……まあ、怪しいっちゃ怪しいけど……」

「だよね！？ よし……クククッ……」

……ん？この子なに企んでるの？すっごい、嫌な笑い方してるんですけど！

「……ヤス君の家に潜入よ！」

で、なんやかんやあって、現在時刻7時。今、琴音とヤスの家の前にいます。

「……ということで、やってまいりました。虎島家です。はい、ちなみにわたくし、ヨネス……」

「そんなの、いいから早く忍びこんじゃおうよ」

そんなのって言われた……。ちよつとぐらい笑ってよ……。せつかく巨大なしゃもじ持ってきたのに……。

「それにしても、本当にシンプルな一軒家だねえ。とりあえず……忍び込めるところある？」

琴音は、辺りを見回しながら言う。まあ、一番いいのは窓とかなんだろうけど……なんでヤスん家、窓ないの？すつごい不思議なんだけど。

「……とりあえず、裏側行ってみようか。もしかしたら、裏口があるかもしれない」

そういって、俺達は裏側に回ることにした。にしてもガーデン

グがすごいな……。ヤスがこんなことするかなあ……？

「……って、あった……。裏口だ……」

ドアノブを回してみる。……開いたよ。結構簡単に入れたね。

「あれえ？真っ暗だなあ。あそこになんかでかい扉が見えるけど」

そう、中は真っ暗なのだ。とりあえず、横のほうにある扉から光がもれてるから、あっちに行ってみようか……。って、あれ？琴音が動かない。

「おーい？どうしたの？琴音え〜？」

琴音の前で、巨大しゃもじを振ってみる。

……返事がない。ただの屍のようだ。

って、そうじゃない！なんで、固まってるんだ？……なんでちょっと震えてんだ！？

「あ、あれ、なんだろう？……？」

そう言いながら、琴音は俺の後ろを指指す。……え？どうしたの？なにかあった？

疑問を持ちながらも、俺も振り返ってみる。

……ゴーレムがいる。

ええええええ！？ちょ、おかしくない！？家の中にゴーレムウウ！？目、光ってるよ！？しかも、なんか唸ってるから！

「つて、危ねええ！逃げるぞお！琴音ええ！」

俺は、琴音の腕をつかむと、ゴーレムを無視して扉の方へと走った。

あれ？ゴーレム追ってこないな。まあ、いい……よしっ！着いた！光が洩れてるから、誰かいるのか……

ガチャッ

「……間違えましたー」

バタンッ

あれ？　なんかおかしいぞ？　なんでメイドさんが見えたんだ、俺。

それに、ここはそんな大きくもないただの一軒家のはずだ。

よし、もう一回確認してみようか。

ガチャッ

……ヤスがいる。ただ………ヤスと俺の距離が50Mメートル近く離れている。

『……………よう』

ヤスが拡声機を使って言う。いや……………

「よう……………じゃないよねえええ！？　なんで家の中こんな広いんだよ！…！　おかしいだろ！　拡声機使わないと会話できない部屋って何！？　東京ドームぐらいあるんじゃないか！？」

「あ、いや、東京ドームの1・2倍ぐらい」

んなこたあ、どうだっていいんだよ！　俺が言いたかったのは、なんでこんなにでかいのかってことだよ！…！　完全に物理法則無視してるよね！？

「……………つて、ちょっと！これ、どうなってるの！？」

あ、琴音ずっと固まってた？やっとしゃべったよ！

「え……………いや、空間を……………ンツウンツ」

お前は、なにわざとらしく咳払いしてんだよ！？しっかり聞こえたよ！？空間って言ってたよねお前！！なにこれ、どこもドア！？

「もう、お前ん家わけわかんねええ！！」

「……………ええーっと、家についてはツッコまないでくれ」

とりあえず、今はなんとか落ちついてヤスと話をしている。……
東京ドーム並みの部屋の真ん中で。

「わかった……………じゃあそれ以外で、いくつか聞きたいことがある……

……………」

「なんだ？言ってみろ」

あ、なんかこいつちょっと偉そうなんだけど。えらい腹立つな。まあ、今はいい。

「まず、メイドが何十人もいるじゃないか。一人貰うことにした」

「聞きたいことじゃなかったの！？それ違うじゃん！しかも、決定事項かよ！」

チツ……やっぱり、ダメか……。

「じゃあ、あのゴーレムはなんだ……」

「ああ、あれはペットの太郎」

なにいい！？ゴーレムをペット感覚ですか！？ってかネーミングセンスねえなお前！

「あんなの、飼ってなにがいいの！？」

「結構、かわいいところもあるぞ？」

うわぁ……コイツいろいろ大丈夫か……？真顔なのが怖いんだけど……。

「……わ、私、もう帰るね？」

なにいい！？琴音え！逃げるのかぁ！？置いてかないで！この家

怖い！

「じゃ、じゃあ、俺も帰るわ！……ってヤス！正面玄関どっちだ？」

「え？何言ってるの？お前ら、入ってきたジャンか」

え……？あんた何言ってるの……？大丈夫？

「いや……俺らが来たのは、裏口だろ？玄関は？」

「は？あれが玄関だぞ？太郎いただろ？」

「……………琴音、GO」

バキィッ！

「いったああああ！？は、鼻から鳴ってはいけない音があああ！」

琴音のエルボースタンプが、ヤスの鼻っ柱を直撃した。うん。すっげえ痛そう。

「……仕方ない。帰るか。琴音」

「そつだね……………」

ヤスからしたら、勝手に家に入ってこられて鼻折られるって理不尽なことなんだろうなあ。まあ、俺の知ったこっちゃないけど

「……って、どうした？ 琴音？」

「……………」

あれ……？ なんで、また固まってんの……？ なに、嫌な予感するんだけど？

「……な、なんか聞こえる」

ん？ なんか聞こえるって？ まさか……この扉の向こうから？

バキッグシャツ……バリバリ

わぁ すごい音がしてる

「……って……な、何が起きてるんだ？」

「……？ 見てみる……………」

「……そ、そうだな……………」

くそう！ どうせ、ここを通らないと外に出られないんだ！ なるよ
うになりやがれ！

ガチャッ

あ、ゴーレムに俺の巨大しゃもじ食べられてる………

第7話・突撃！隣の晩御飯（後書き）

なんか、コメディー要素強すぎるな……。

第8話：今日はスポーツテスト

「おーい！修司！次の授業、体育だぞ！」

休み時間、俺は机に突っ伏して寝ていると、ヤスにそう言われた。

「んあ……？マジ……？かつたりい……」

「いいから、早く更衣室行こうぜ」

重たい体を無理やり起こして、目を擦りながらダラダラと歩く。

そして、更衣室に入る………とところでヤスに襟首を掴まれた。

「待てコラ。そっちは女子更衣室だ。俺等は向こう側。全然場所違
うだろ」

チツ……寝ぼけたふりして入ろうとしたのに……。余計なことし
てくれるぜ。ヤス。

「おいおい。俺は助けてやったんだぞ？なんだよお、その目は」

「はあ？お前なに言って……」

「後ろで綾川が、ガン見してんぞ？」

……お前、命の恩人だよ。ヤス……。

「みなさん。初めまして、僕は岡田陸朗おかたりのくろうと言います。これから、よろしく願います」

この人が先生か……。すごいガリガリだな。本当に体育の先生か？なんか体育の先生ってすごい運動できるイメージあるんだけどな。

「えー早速ですが、スポーツテストをします」

うわ……。めんどくせえ……。やりたくねえなー……。

「とりあえず、50M走をしたいと思います。まずは、先生がお手本を見せます」

は？50M走でお手本なんか必要ねえだろうよ？大丈夫か？

「じゃ、えー……冴上君。計ってくれるかな？」

「……分かりました」

先生から、ストップウォッチを受け取りながら言う。まったく、たかが走るだけなのに、なんでお手本なんだ？

「……じゃ、行きますよー！……よーい、ドンー！」

……ん？

「……………タイム。4秒32」

いやいやいやいや！！ありえないでしょ！！この先生はやっ！！
世界記録超えてんじゃないのこれ！？

「いやゝあっはっはゝ。つい本気で走っちゃったよ。まあ大体こんな感じだから。みんな計ってゝ」

……この先生自慢したかっただけか！？なんだ、その満足したよ
うな顔は！っつーか、みんな引いてるから！誰も、なにも言わない
よ！

「とりあえず……計るか……」

あの先生のせいで、さらにやる気なくなっただよ……。

「冨上、7秒08。虎島、7秒77」

「ノオオ！クソオオ！修司に負けたああ！」

50M走は、二人づつ計るらしいから、俺はヤスと計った。俺は、なかなか速いタイムだ……。めんどくせえ……。いや、ホントにめんどくさいよ？ただ、成績のこと考えて本気で走つといた方がいいかなって思ったただだから！モテたいか思っただけから！

「修司……手加減してくれって言ったじゃん……」

「……いや、でも、お前ラッキーセブンだぜ？すごくねそれ？」

「いや、すごいけど！今は関係ないじゃん！」

まあ、そうだな……。それより、50M終わったら、持久走か20Mシャトルランか……。

「なあ、ヤス。次、持久走かシャトルランかどっちかだけ選ぶんだってよ。どっちにする？」

「シャトルラン。1500Mなんか走ってられるか」

じゃ、俺もシャトルランでいいか……。俺も体力には自信がないからな……。

「よおし。これも勝負するか？」

「ハア……ハア……死ぬ……」

「ヤスウ……早くリタイアしたほうがいいんじゃないか……?」

俺とヤスは、死にそうになりながらもまだ走っている。

「……も、もうダメだ……」

か、勝った……。やべえ……。もう、死にそうだ……。

「冴上君、152回。虎島君、151回」

……ってか、単純に考えて1500Mの二倍は走ってるよ……。
アホだな俺ら……。

「すっごーい！よく、そんなに走れるねえ！」

琴音がそう言いながらやってきた。……女子もシャトルランやってたのか……。全然気付かなかった。

「……い、いいから酸素くれ。……死にそうだあ」

ヤスがそう言うと琴音は酸素缶を渡している。この野郎……！俺にもよこせえ……！

シュー

「うええ！？ゲホッ、グヘエエ！」

酸素を吸ったヤスは、急に叫びだして倒れた。しかも、口の周りが青くなっている。………ってか、おいしい！それカラスプレーじゃねえかああ！吸わなくて良かったあ！！

「あ、ごめん、間違った。それじゃなくてこっちだ」

「ごめんで済むかあああ！し、死ぬわああ！ってかどうやったら間違えるの！？まず、なんでそんなスプレー缶いっぱい持ってるのさ！」

ヤス本気で怒ってるな……。まあ俺の知ったことではない。次行ってみよう。

結局、あの後口の周りが青色のヤスと反復横跳び、垂直跳び、握力測定を終えた。ちなみに、記録は平凡だった。

「お、修司。見ろよ、綾川が投げるぞ」

ん？女子はハンドボール投げか……。そういえば、琴音って運動神経いいのかな？どれどれ……

ブンツ……キラーン

……ハンドボールは、お星様となった。……えっ！？キラーンって！キラーンってなによ！どんだけ飛ばしてんの！？

「ちょ！綾川、今なにしたの！？ありえなくね！？」

「あ、修司君、ヤス君。見てたの？いや、投げすぎちゃった。テヘ

ッ

「琴音は、舌を出して、おどけた様子で言った。……そんなことされても、可愛くないよ!? いや、可愛いけどもさ。でも、ハンドボールをお星様にする子だよ!? 怖いだけだった！」

「ってか、どうやってたらあんなに飛ぶんだよ！」

「それが非常に気になる! でも、どんな理屈的なこと言われても俺は信じないよ……」

「えっと、とりあえず腕力に物を言わせて…………」

「…………納得! でも、君! ここでもう一つ疑問が浮かんできた! ……どれだけ力あるのおおお! ?」

「まあ、ようは思いつきり投げるだけだった!」

「無理です! それは、あなただからこそできること! 他の人が思いつきり投げたつて全然飛ばないから!

「修司……見なかった……。俺は何も見なかった……!」

「ヤスは、すべてをなかったことにしようとしている。………そうか、そうだなヤス。」

「……俺も、なにも見なかったよ！」

「えー!? ちょ、待ってよ! なんで!?!」

俺とヤスは、琴音の言葉を無視して、そのまま次のテストを受けに行った。

「え〜では、今日全てのテストを受けられなかった人は、今度の授業にまた時間を作りますので、そのとき受けて下さい」

「やっと終わったなあ……。もう、疲れたよ。」

俺らが、全てのテストを受け終えたところで、授業が終了した。

「とりあえず、もう寝たいよ、修司……」

「俺もすんげえ眠たい……。早く着替えて寝るか……」

意識が朦朧としてきた俺は、目を擦りながら階段を上った。

「ヤスウ……。眠い。おんぶ」

「無理だ。俺はお前の2倍は眠い……」

「いやいや……。俺はお前の4倍は眠い……」

そんなくだらないことを話しながら、階段を上りきった俺は、更衣室に入ろうとした。

ドスッ

「ガッ!? な……なに……!?!」

しかし、急にハンドボールをお星様にした人……もとい、琴音が袈裟斬りチョップをしてきた。……やべえ、死にそう……。

「……修司君。何してるの……?」

……は?俺は何もしてな

「……は、女子更衣室だよ?」

……あ。……ガチ本気で間違えた……。

「ウフフ……覚悟できてる？」

ギヤアアアアアアアアア!

第9話・勉強会を開催しようか

「「……………え？」」

俺とヤスは、同時にそう言った。…………先生、今なんておっしやいました？

「だから、もう来週から中間テストだ。赤点とったやつは補修。そんだけだ」

めんどくさそうに言いながら、乙女先生は教室を出て行った。……………なんてこつたああ！テストだとおおお！？すっかり忘れてたああ！

「…………キコエナイ、キコエナイ」

ヤスは、耳を押さえながらなにやらブツブツ言っている。…………あの野郎、現実逃避してやがるな。

「つてか、やべえな…………勉強しねえとお…………」

幸い、土日は何も用事はないから勉強する時間は結構ある。

「いやあ〜テストかあ〜、ヤス君ヤバそうだね〜」

「そう言う琴音はあんまりヤバそうじゃないな。自信あるのか？」

「琴音は笑いながらヤスを見ている。琴音は頭が良かったのか……？そんな話聞いてないぞ……」

「正直ヤバい。でも自信ならあるね」

意味がわからん……。ハッ！……まさか、カンニングか！？そんなことする子だったなんて……。

「ちよ、ちよつと。そんな蔑んだ目で見ないでよ！カンニングとかじゃないからね！？」

「違うのか？じゃあ、どういうことだ？」

俺がそう聞くと、琴音は『よくぞ聞いてくれました！』と言わんばかりに、満面の笑みを浮かべた。

「フッフ……。私には家庭教師がいるのよ！」

「……ふん」

「あれ……反応薄いね。なんかひどくない？」

いや、そこまでビククリすることでもないでしょうよ。家庭教師を雇ってる人もそう少なくないつて。

「とりあえず、土日家庭教師の人と勉強するってか？」

「うん。まあ土日勉強した分は、一週間後にはデリートされちゃうけどね……」

いや、琴音の事情は知らんけどさ。しかし、参ったな……。

「俺とヤスと琴音で、勉強会でもしようかと思ってたんだけどな……。ヤスと二人になっちまうか」

まあどうせ、頭があまり良くないのが（けっしてバカとは言わない）3人集まっても変わらないからな。

「え？じゃあ、修司君達も一緒に勉強する？」

「……なに？いいのか？」

ヤスが返事をする。やっと現実を見る気になったらしい。しかし、目が赤い……。ヤスがマジ泣きしたのはツッコんじゃいけないんだろう。

「全然オツケー！今日から勉強しちゃう？」

「ん。そうだな、場所は琴音の家？」

「うん。私の家の方がいいかな」

ふむ、じゃあ早速お邪魔させてもらうか。

で、色々あって今俺達3人は琴音の家へ向かっている。しかし気になることが一つ……。

「へー、琴音の家って俺の家から近かったんだな」

「そだね。そんなに離れてないよ」

そう、琴音の家は俺の家から、歩いて5分程度の場所にあるらしい。

「ホラ、着いた着いた。ここが私の家」

「……なに!?!」

俺と、ヤスが同時に声を上げた。まさか……。これが、琴音の家だったのか……。!? そうだったのか……。なんかごめんな琴音。

「ちょっと!どっち向いてんの!うーしーろ!」

「え?後ろ?」

「当たり前でしょ!ってか勝手に、可哀想な人だっと思ってたでしょ私のこと!」

なんだ、言ってくれないとわからんよ。てつきり公園に住んでるもんだと思っっちゃったから。

「はあ……いいから、入って」

「「おじゃまします」「」

「はい、じゃ早速お勉強タイムにしたいと思います」

「え〜」

琴音が勉強道具を出しながら言うと、ヤスが不満を漏らした。

「あのなあ、ヤス。今日は勉強が目的で来たんだぞ？」

「いや、家庭教師の先生が来てからでもいいじゃん」

ヤスは、そう言うと畳の上に寝そべった。まったく……。こいつ
こんなんで大丈夫なのか？

「うーん……じゃ、それまでみんなどれくらい勉強できるかチエックしとく?」

「ん? まあ、いいけど。どうやってチエックすんの?」

「適当に問題出すから、答えてみてよ」

琴音は、社会の教科書を広げながら言う。まあ、そんなだけなら簡単だな。

「じゃあ修司君から、歴史の問題! 三民主義を唱え、1911年の辛亥革命で中華民国をたてたのは誰?」

「あー……孫文だっけ?」

「……ファイナルアンサー?」

うわっ……。めんどくさ……。

「ファイナルアンサー……」

「……………」

あああ! 溜めが長あああ! いらんわあそんなん!

「……正解っ! 結構やるねー。んじゃ、ヤス君行くよー!」

……あつてたか。しかし、ヤスは本当のバカだからな。歴史とか無理なんじゃないか？

「なるべく簡単なのでお願いします」

「オツケー！んじゃ〜……1853年：4隻の軍艦を率いて浦賀沖に来航し、日本に開国をせまったのは誰!？」

「えっと……俺のひいおじいちゃん？」

バキッ

「いったああああ！綾川あ！な、なんで殴るのさ!」

いや、ヤス。今のはお前が悪かったと思う。お前はひいじいちゃんがペリーだったと言っのか？

「ふざけないで答えて……?」

「いや、本当に真面目に答えたって!」

それはそれでヤバいって！重症だよ!？ペリーとひいじいちゃん
の区別つけようぜ!？」

「もういいよ……。じゃあ次は」

ピンポーン

「あ、もう来たのかな!？」

琴音は、ドタドタとせわしなく玄関に走って行った。

「家庭教師か……。どんな人だろうなあ」

「まあ、いい人だったらいいよな」

優しい人だったらいいんだけど……。鬼家庭教師とかじゃないよなあ……。なんかいまさら緊張してきた……。

「今日は、私の他に二人勉強教えてあげてよ」

「あら。誰か来てるの？」

「うん。こっちこっち」

廊下の方から、声が聞こえてきた。なんだ……。女の先生か……。優しい先生っぽいし、大丈夫かな……。

ガチャッ

「「「……………え？」」」

俺とヤス……………そして家庭教師の先生が同時に声を上げた。

「な、なんで……………？」

先生が驚いた様子で言う。いや、俺もビックリ……………その先生とは

「はい！この人が先生だよー！修司君達も知ってるでしょ？」

我らが学級委員長『桐嶋早弥』だった。

第9話・勉強会を開催しようか（後書き）

しばらく、更新遅れると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5693g/>

彼女を作るために努力しようぜ

2010年12月10日19時21分発行